

静嘉堂文庫蔵陸氏十萬卷楼本『開元天宝遺事』—略解題・簡校—

高田 信敬

略解題小引

飛鳥井雅親（一四一六—一四九〇）は『文明年中応制詩歌』に漢籍由来の一首を詠出した。文明十二年（一四八〇）八月二十四日のことである。^①

李太白 榮雅 柏木入道殿

水ぐきにさくをみし夢まさしくぞことはの花と世にはほひける

夢に花筆に生ずと見てより作文勝れり（以下、資料引用に際し表記を改めることがある。返点は私に施す）和歌表現と左註とにより、王仁裕『開元天宝遺事』68夢筆頭生花——数字は後掲簡校の章段番号——を典拠とすることが確かめられよう。^③「李太白少時夢_三所用之筆頭上生_レ花、後天才瞻逸名聞_二天下_一」が、その文言。雅親が見た書物は、別集卷十四夢筆生花に「李白夢_二筆生_レ花、自_レ是才思日進」の記事を有する祝穆『事文類聚』かもしれない。この類書は室町時代に相当程度流布し、歌人の目にも触れやすかったであろうが、源流を尋ねれば『開元天宝遺事』に至る。そして雅親の弟雅康（一四三六—一五〇九）が詠んだ『雅康卿詠草』中の歌も、やはり漢籍との関わりを持つ。

室町殿にて三十首歌人々によませられし時、馴花（53）

花留人

我ぞくらす鳥はかへりてはなの鈴ふりすてがたき春の木かげに (68)

抛りどころは陳元靚『歳時広記』卷一春護花鈴の「天宝遺事、天宝初寧王少時好_レ声色_一、風流蘊藉、諸王弗_レ如也、每春日於_レ後園中_一紐_二紅糸_一為_レ繩、綴_二繫鈴_一繫_二糸花梢上_一、有_二鳥鵲翔集_一則令_下園史掣_三鈴索_一以驚_レ之、号曰_二括香_一に一応求められるけれども、「天宝遺事」と明記される通り『開元天宝遺事』26花上金鈴に端を発する。その記事は「天宝初、寧王日侍好_二声樂_一、風流醞藉諸王弗_レ如也、春時于_二後園中_一初_二紅糸_一為_レ繩、密綴_二金鈴于花梢之上_一、每_二禽鳥翔集_一則令_下園史掣_二鈴索_一以驚_レ之、蓋惜_レ花之故也、諸宮皆效_レ之」であり、右『歳時広記』と少なからぬ差を見ること、それはそれとして、表現理解に『開元天宝遺事』が有益でありまた必要でもあることは、言うまでもない。洪邁『容齋隨筆』は誤りの多い「俗間所伝淺妄之書」(卷一淺妄書)として指弾するが、陸子遜跋の「此書所_レ載、明皇時事最詳、至_二一話言一行事_一、後夫字文間所_レ引、大抵出_二於此書_一多矣」が公平な評であろう。この「後夫字文間」を寛永版本は「後人文字間」に作り、解しやすい。それ自体読んでおもしろく、また考証の素材として価値のある文献ながら、しかし手頃に読める本文の提示も、伝本・享受の俯瞰など基礎的領域の研究もほとんどない⁴ように思われ—不学にして^某一人が知らないのか—、ここに資料一つを紹介する次第。

一、訓詁注釈

静嘉堂文庫蔵陸氏十萬卷楼本『開元天宝遺事』(一三—二二)がその対象となる。具体的記述の前に、どのような利用法があり得るのか、いくつか例示しておく。

i 為広詠草

永正三年

同二月廿四日、禁裏御月次短冊に、花

ゐる鳥は驚きあへぬ花の鈴のあはれ嵐にか、らましかは(注5)(24)

先引雅康歌と同じ26花上金鈴——『歳時広記』ならば護花鈴——の故事による。この典拠と106鬮花とを用いた作はかなり多く、稿を改めて詮索したい。

ii 世説新語 汰修第三十

王武士被_レ責、移_二第北芒下_一、于時人多地貴、濟好_二馬射_一、買_レ地作_レ埒、編_レ錢匠_レ地竟_レ埒、時人号_二金溝_一

王濟の豪奢を語る条。「編錢匠地」が何故「埒」の完成と繋がるのか、よく分からない。『開元天宝遺事』65富窟を検するに「以_二銅線_一穿_レ錢瓮_二於後園花径中_一、貴_二其泥雨不_レ滑也_一」と見え、「以銅線穿錢」はおそらく「編錢」同様の行為であるうから、錢を貫き地に鋪くのは贅沢な滑り止め、すなわち馬が走りやすくなるための措置と臆測する。

iii 酉陽雜俎 卷一忠志

天宝末、交趾貢_二龍腦_一、如_二蟬蠶_一……上夏日嘗与_二親王_一碁、令_三賀懷智独奏_二琵琶_一、貴妃立_二於局前_一觀_レ之、上數子將_レ輸、貴妃放_二康国獅子於坐側_一、獅子乃上_レ局、局子乱、上悦(下略)

『楊太真外伝』にも記される逸聞である。話の主眼は異なるが『開元天宝遺事』120獅子乱局の「一日明皇与_二親王_一碁、令_三賀懷智独奏_二琵琶_一、妃子立_二於局前_一觀_レ之、上欲_二輸次_一、妃子將_二康国獅子_一放_レ之、令_下放_二局上_一乱_中其輸贏_上、上甚悦焉」はよく似た文章となっており、注解にあたっては引ききたい文献の一つ。

iv 唐令 儀制令第十八(7)

諸太陽虧、有司預奏……月蝕奏擊_二鼓於所司_一救_レ之(下略)

本朝の令には「月蝕」以下を継受していない。「擊鼓於所司」は欠けた月を救う儀礼であろう。『開元天宝遺事』115 擊鑑救月の「長安城中、毎月食時、即士女取鏡向月擊之、萬郭如是、蓋云救月蝕也」は、令に規定された「擊鼓」と類似の行事があつたことを示す。

v 參天台五臺山記 卷五 熙寧五年（一〇七三）十一月二十日

天晴、卯一点從大原府龍図許送粥并有齋請・・・焼沈檀香、如日本不断香、每一人床有作長一尺立人形、彩色甚妙、捧火舍向人（下略）

香炉を持つ精巧な人形の記事。『開元天宝遺事』38 燭奴・103 燈婢に燈燭を捧げる木彫の童子や婢が描かれ、66 床畔香童は「矮童二人捧七宝博山爐」とある。童子に香炉を持たせまた人形を配置する風俗が、唐より宋に至るまで続いていた。

本朝においては、直接『開元天宝遺事』を参看したか類書・歳時記の類から孫引きか一概に決めがたいにせよ、室町時代以降、特に江戸時代にはよく利用された。その余波は硯友社の同人にまで及び、享受の事例を列挙するのみにても優に一書を成そう。文学作品や史料の訓詁のためにも、言葉の背景を生き生きと把握するためにも、基礎からの考究を要する。

二、引用

本文を考え校訂する材料として、また享受相の一つを確かめる手がかりとして、後代の文献に取り込まれた『開元天宝遺事』は、大切な素材となる。目睹し得た文献中引用例が多くその影響も大きいものは『事文類聚』と『歳時広

記』とであろうが、これらについては別稿を用意して報告したい。以下、あまり省みられない翟灝『通俗編』及び藤江養斎『淵鑑類函纂要』についてのみ、備忘として書き留めておく。まず『通俗編』⁹⁾から。引用例の次に当座の心覚えを記す。

イ 卷二地理 冰山

開天遺事、楊国忠相、公卿以下莫^レ不^二趨媚^レ之、張彖曰、君輩倚^二楊右相^一如^二泰山^一、吾以為冰山耳、〔按〕司馬溫公採此語入^二通鑑^一

* 『開元天宝遺事』 49 依冰山。文章は大きく異なる。

ロ 卷九儀節 名紙

開天遺事、長安平康坊妓女所^レ居、毎年新進士以^二紅箋^一作^二名紙^一、游^二謁其中^一

* 48 風流藪沢を節略。

ハ 卷十祝誦 喜信

開天遺事、新進士及第、以^二泥金書帖子^一附^二于家中^一、至^二鄉曲^一、親戚以^二声樂^一相慶、謂^二之喜信^一

* 75 喜信とほぼ同文。

ニ 卷十一 品目 虛有其表

開天遺事、蕭蒿草蘇頰爲^レ相制云、国之瓊宝、頰父名瓊、明皇曰、豈可^下斥^二其父^一名擲^中于地上、曰虛有^二其表^一耳

* 現存『開元天宝遺事』諸本に見、逸文か。

ホ 同 癡漢

開天遺事、張方回精神不^レ爽、時人呼為^二癡漢子^一

* 7 癡賢の一部分を切り入れる。

へ 同 蘊藉

開天遺事、寧王風流蘊藉、諸王弗_レ如也

* 26 花上金鈴の冒頭。

ト 卷十六身体 擡頭不起

開天遺事、華陰簿張象爲_二守令所_レ抑、歎曰、若_レ立_三身矮屋之下_一、使_三人擡頭不_レ起、棄_レ官而去

* 49 依冰山後半の一部に相当、文章に差あり。

チ 同 顏厚

開天遺事、進士楊光遠、干_二索權豪_一無_レ厭、或遭_二撻辱_一略無_レ改_レ色、時人云、光遠慚顏厚如_二十重鉄甲_一

* 5 慚顏厚如甲を節略。

リ 同 潤肺

開天遺事、楊貴妃宿酒初消、多苦_二肺熱_一、晨游_二後苑_一、口吸_二花露_一以潤_レ肺

* 11 吸花露を節略。

又 卷二十釋道 半仙

天宝遺事、宮中寒食鞦韆、帝嘗呼為_二半仙之戲_一

* 77 半仙之戲。文章に差あり。

ル 卷二十七飲食 醉漢

開天遺事、張曲江曰、李林甫議事如_二醉漢脳語_一

* 136 醉語の末尾、ほぼ同文。

ヲ 卷二十九禽魚 被底鴛鴦

開天遺事、明皇與妃子昼寢「水殿」、宮嬪輩凭「檻看」雌雄「鵝鵝戲」于水中、「帝曰爾等愛」水中鵝鵝、「爭如」我被底鴛鴦

* 76 被底鴛鴦を節略。

ワ 卷三十四狀貌 鮮活

開天遺事、帝宴「近臣禁苑中」、指「李林甫」曰、檻前盆池魚數頭、鮮活可「愛」、李林甫曰、頼「陛下恩波所」養

* 40 盆池魚後半を抄出、ほぼ同文。

以上一三条、見落とし絶無とは言えないので、是非追証をお願いする。又の「天寶遺事」を除き、他は全て「開天遺事」と出典表記しており、字句の創意や抄出方法など問題はいくらか拾えるけれども、この「虚有其表」が最も重要である。撰者王仁裕の序——本朝伝来の諸本にのみ存——に「総成一卷、一百五十九条」と見え、現存本いずれも一四六条を有するので、序の文言を信ずればその差一三条分が失なわれたことになる。逸文の期待が持てる資料と言えよう。

次は『淵鑑類函纂要』の関連項目。抄出の基となつた『淵鑑類函』より引くべきであるが、『淵鑑類函』の本体に目を通してないので、行くに徑（こま）を用いるお粗末は十分承知し、手元の『淵鑑類函纂要』に依る。

カ 卷二設官 立身矮屋

又曰、唐張象爲「華陰簿」、爲「守令所」抑、嘆曰、大丈夫有「凌雲蓋世之志」、而拘「于下位」、若「立」身矮屋之下、「使」人擡頭不「得」、遂弃「官去」

*ト擡頭不起と同じ典拠の49依氷山。『開元天宝遺事』から遠ざかり『通俗編』との共通性が高い。

ヨ 卷四禮 幔後牽一糸

肆考、唐宰相張嘉貞有_二五女_一、各持_二一糸_一在_二幔後_一、令_二郭元振前牽_レ之_一、得者爲_レ嬪、元振見_三糸有_二五色_一、牽_二一紅糸_一、遂得_二第三女_一

*18牽紅糸取婦に対応するが字句は大いに異なる。『開元天宝遺事』を出典とせず「肆考」より採ったものであろう。ただし「肆考」未勘。

夕 卷四術藝 局上獨子

酉陽雜俎、上嘗與_三親王某_一、貴妃立_二於局前_一觀_レ之_一、上將_レ輸、放_二康國獨子_一上_レ局、局子亂、上大悅

*引用文言の限りでは『開元天宝遺事』を典拠とする如くだが、本条冒頭に記す通り前節IIIにおいて言及した『酉陽雜俎』と見る。

レ 卷四宝貨附火 記事珠

開元遺事、張説爲_レ相、有_レ人患_二一珠_一、紺珠有_レ光、事有_二遺忘_一、玩_二此珠_一、便覺_二神心開悟_一、名曰_三記事珠_一、說秘而宝_レ之

*11記事珠を節略改変。

ソ 卷六禽 堂燕致書

天寶遺事、長安富商任宗爲_二賈湘中_一、数年不_レ婦、其妻紹蘭親_二堂燕_一長吁、語曰、我聞爾從_二東海_一、往復必經_二湘東_一、我墜離_レ家數年、欲_三憑_レ爾付_二詩任郎_一可乎、燕即飛下、紹蘭作_二一絶_一云、我墜去_二重湖_一、臨_レ睂泣血書、慙勸憑_二燕翼_一、寄_二與薄情夫_一、將_レ詩系_二燕足_一、燕遂飛鳴而去、時宗在_二荊州_一、忽有_レ燕繞_レ身而飛、止_二於肩_一足有_二

小封一、乃妻所レ書也、宗感而泣下、次年帰

*102傳書燕を節略。

瞥見するところを記すのみ、当今流行の電腦網路検索を行つてはいない。機械操作に長じた頭のよい方の追補を期待する。

三、諸本と底本と

諸伝本については別稿に概略を示しておいたので、その結論の粗々を示せば、伝本相互における字句の出入りや異同等細かな違いは勿論あるけれども、構成上の違いにより本朝遺存の書物と海彼所伝の典籍との二類に分かたれる。すなわち王仁裕序・標目の一覧・本文・陸子適跋が本朝の形であり、海彼の事例は本文のみで一書を成す。本文は両者共通して一四六条——ただし寛永版本は137暖玉鞍を欠き一四五条——だが、序の「総成一巻、一百五十九条」と比べて一三条を脱すること、前節に述べた通り。勿論、序を欠く唐土の伝本では、このことは分らない。中院通村の手がけた元和古活字版やそれを受ける寛永二十年整版本など、我が国の伝本は、南宋紹定元年（一二二八）刊本の系統である。

さて、底本はどのような特徴を持つか。まず静嘉堂文庫蔵陸氏十萬卷楼本（一三二—二二二）の、書物の外形について記す。

明朝綴じ一冊。砥粉色無地紙表紙（縦二六・〇、横一五・五糎）は後補、虫損・湿損の補修時に付したものと推される。外題はないが、書根に「開元天寶遺事」と墨書、補修前の題号を書き直した痕跡がある。見返しと前遊紙一丁

も後補の白綿紙。本文は目の詰んだ料紙を用い内題「開元天寶遺事卷上」、改行して「建業張氏銅板印行」。每半葉九行一八字の形式を崩さず、終始謹直に写す（書写面縦約一六・五、横約一一糎）。趙松雪体の流れに棹さす書風か。墨付三八丁、後ろ遊紙に楮紙風の紙片（縦二一・五、横二一・五糎程度）二つ折りを貼る。遊紙を包むように糊付けし、そのオモテ面に黄丕烈（一七六三〜一八二五）識語六行。一冊に閉じられているが、内題から判明する分巻は、卷上六一章段（一玉有太平字）61射団）・卷下八五章段（62探官）146美人呵筆）であり、顧氏文房小説本と同じ二卷仕立て——続百川学海本・說郭本は分巻せず四庫全書は四卷に分ける——、各巻の章段数も一致する。卷首に「靜嘉堂珍藏」（朱文双辺）・「歸安陸／樹聲藏／書之記」（朱文单辺）、卷尾にも「歸安陸／樹聲藏／書之記」の蔵書印を押す。陸樹声（一五〇九〜一六〇五）は明代の学者・蔵書家ゆえ、当然樹声以前の書写になる。また「建業張氏銅板印行」から明銅活字本の転写と推されるが、海彼の書誌学に疎いので、詳細については識者のお教えを乞う。さらに陸子適識語により、陸心源の十萬卷樓本として渡来したこの書物には、紹定元年刊本↓張氏張氏銅活字本↓陸樹声旧蔵本の系譜が想定されよう。

先に触れた如く、海彼の諸本はいずれも王仁裕序・標目一覽・陸子適跋を持たない。ゆえに十萬卷樓本の特異な点は、明鈔本ながら陸子適跋を持つこと、すなわち紹定元年刊本を遠い祖先として明記し、本朝遺存の伝本に近いところの、その構成にある。確かめうる限り日中を通して最も古い写本たることが、また大きな価値といえよう。ただし本文に錯綴があり、第二丁と第二丁の間に第四・三丁を置けば、正しく読める。さらに、唐土の諸本では分巻に変異が多く、それぞれの由緒を確かめることは難しい。陸氏十萬卷樓本によって、顧氏文房小説本のそれが一定の支えを持ちそうなことも判明する。略解題を付し紹介するゆえんである。なお、黄丕烈の識語については、西泠印社呉氏聚珍版『開元天寶遺事』付載跋文・『黄丕烈蔵書題跋集』等との比較考証を要するので、後稿に譲る。

注

- (1) 井上宗雄「文明後期の歌壇」(『中世歌壇史の研究室町前期』第七章)。
- (2) 統群書四二二。『亜槐集』は卷九雜上に「李太白水ぐきにさくとみし夢まさしくぞことばの花と世に匂ひける」(1063)として小異ある形にて収め、左註を欠く。よつて家集による限り詠歌事情は不明。
- (3) 『文明年中応制詩歌』中、他に『開元天宝遺事』を引いた可能性のある歌は「楊貴妃 教国滋野井殿 心ありて花も情けやふかみ草人の手ふれし色に咲けん 花にたとへたり」が104解語花と近い。しかしこれは李白「清平調詞」あたりに典拠を求むべきであろう。
- (4) 諸本の概略と享受例の若干に関して愚文「本文と引用と―『開元天宝遺事』ことはじめ―」(『文献学の栞』第一部)に少々触れたので、本稿は文証が大略重ならないよう構成する。
- (5) 同じ歌を『參議濟繼集』は「花ある鳥のおどろきあへぬ花のすゞの哀あらしにか、らましやは」(753)とする。『為広詠草』の混入か。
- (6) 幸田露伴『楊貴妃』にも描かれるが、その出典は『西陽雜俎』か『楊太真外伝』かであろう。『開元天宝遺事』を引いてはいない。
- (7) 仁井田陞『唐令拾遺』による。
- (8) 内容の興味深さにより、渡来すれば好んで読まれるはずであるが、掛け値なしの管見では、南北朝に遡る享受例を見ない。このことは、直接唐土から朝鮮半島を経由してか、いずれであっても舶載時期推測に対する一つの示唆となろう。
- (9) 大化書局版点校本による。

(10) 注(4)の愚文。

一五四

簡校『開元天宝遺事』

凡例

一、静嘉堂文庫蔵『開元天宝遺事』(二三―二二)を底本として翻字する。底本の錯簡を訂し並べ替えたので、丁付けの数字が一部整序しない。

一、底本の表記を可能な限り尊重し「明・明、皆・時、目・以」等も区別して翻字するが、表記の具体相を技術的に再現し得ない場合は、適宜通行の文字を用いる。

一、底本の文字に問題がある場合、その右傍にママと記した。

一、本朝の流布本たる寛永二十年版本を下欄に比較し、「筋―筋」ならば、底本「筋」・寛永版本「筋」であることを意味する。返り点・傍訓・刊記は対校せず、異体字については適宜異同を掲げたが、その全てには及ばない。なお137暖玉鞍は寛永版本に本文を欠き、また逆に底本は王仁裕序と標目とを持たないので、これらは対校し得ない。

一、改行・改丁は底本に従い、丁の変わり目は「(数字)を以て示す。オ・ウはそれぞれ丁のオモテ・ウラに対応する。

一、標目には新たに通し番号を付す。

一、特殊な文字・底本の損傷・補筆等の問題がある場合は、当該箇所右傍に*を付し「原状」において説明する。

開元天寶遺事卷上

建業張氏銅板印行

卷上―ナシ

建業張氏銅板印行―ナシ

1 玉有太平字

1 玉有太平字―標目の前に別行「開元」あり

開元元年内中因雨過地潤微裂至夜有光宿衛者記其處所曉乃奏之上令其鑿地得寶玉

其鑿―鑿其

一片如拍板樣上有古篆天下太平字百僚稱

拍―拍

賀收之内庫

2 步輦召學士

明皇在便殿甚思姚元之論時務七月十五日

┌(一才)

明―明 元之―元崇

苦雨不止泥濘盈尺上令侍御擡輦召學士來

侍御―侍御者 輦―步輦

時元之爲翰林學士中外榮之自古急賢待士

元之―元崇 賢―賢

帝王如此未之有也

此―此者

3 賜筋表直

筋―筋

宋璟爲宰相朝野人心歸美焉時春御宴帝以所用金筋令内臣賜璟璟雖受所賜莫知其由未敢陳謝帝曰所賜之物非賜汝金蓋賜卿之

所用―所用之 璟雖―雖 蓋―蓋

筋表卿之直也璟遂下殿拜謝*

4 截鐙留鞭

┌ (一ウ)

姚元之初牧荊州三年受代日闔境吏民泣擁馬首遮道使不去所登之馬鞭鐙民皆截留之以表瞻戀新牧具奏之褒詔美焉就賜中金一千兩

元之┆元崇 吏民┆民吏
使不去┆不使去 所登┆所乘
具┆具其事

5 慙顏厚如甲

進士楊光遠惟多矯飾不識忌諱遊謁王公之門干索權豪之族未嘗自足稍有不從便多誹謗常遭有勢者撻辱畧無改悔時人多鄙之皆云楊光遠慙顏厚如十重鐵甲也

┌ (四才)

鐵┆鍊

6 七寶山座

明皇於勤政樓以七寶裝成山座高七尺召諸學士講議經旨及時務者得升焉惟張九齡論辨風生升此座餘人不可階也皆論美之

明┆明 以┆以

者┆勝者 升┆昇

升┆昇 皆┆時

7 癡賢

右拾遺張方回精神不爽時人呼爲癡漢子每朝報有失便抗疏論之精彩昂然進不懼死明皇帝以爲右拾遺曰張方回忠賢人也

賢—賢

帝以爲—常謂 曰—ナシ 賢—賢

8 蜂蝶相隨

都中名姬楚蓮香者國色無雙時貴門子弟爭相詣之蓮香每出處之間則蜂蝶相隨蓋慕其香也

「(四ウ)

雙—双

蓋—蓋

9 掃雪迎賓

巨豪王元寶每至冬大雪之際令僕夫自本家坊巷掃雪爲徑路躬親立于坊巷前迎揖賓客就本家具酒炙宴樂之爲暖寒之會

冬—冬月

巷—巷口 徑路—遙路 于—於

就—親就

10 夢虎之妖

周象者好畋獵後爲汾陽令忽夢一乳虎相逼驚而睡覺因茲染病後有僧海寧者因過象門

「(三オ)

後—后 一—ナシ

病—疾

謂隣叟曰所居有妖氣久則不可救也隣叟遂聞於象象召僧令視之僧曰當與君禳之遂擇日設壇持劍禹步誦呪自大門而入至于寢所^{*}遶患人數遍而叱之忽於床下作一虎聲家人悉驚奔散周象不覺自床下伏死於地僧曰水噀之須臾如故

11 記事珠

開元中張說爲宰相有人惠說一珠紺色有光名曰記事珠或有闕忘之事則以手持弄此珠便覺精神開悟事無巨細渙然明曉無一所忘說秘而寶之

12 遊僊枕

龜茲國進奉枕一枚其色如瑪瑙溫溫如玉其製作甚朴素若枕之則十洲三島五湖四海盡在夢中所見帝因名爲遊僊枕後賜與楊國忠

┌ (三ウ)

所居—此居

象象—象々

于—於

遍—偏

不覺—亦不覺 目—以

惠說—惠於說

精神—心神 明—明 無—一無

寶之—至寶也

僊—仙

瑪瑙—碼瑙 溫溫—温々

朴—撲 島—嶋 五湖四海—四海五湖

名—立名 僊—仙

13 隨蝶所幸

開元末明皇每至春時旦暮宴於宮中使嬪妃
輩爭挿美花帝親捉粉蝶放之隨蝶所幸幸之
後因楊妃專寵不復此戲也

「(二才)

嬪妃—媚妃

輩—輩 美花—艷花

不—遂不

14 記惡碑

盧奐累任大郡皆顯治聲所至之處畏如神明
或有無良惡跡之人必行嚴斷仍以所犯之罪
刻石立本人門首再犯處于極刑民間畏懼絕
無犯灋者明皇知其能官賜中金五千兩璽詔
褒諭焉故民間呼其石爲記惡碑

明—明

于—於

灋—法 明—明 五千—五十

15 自暖盃

內庫有一酒盃而有青色紋如亂絲其薄如紙
于盃足上有鏤金字名曰自暖盃上令取酒注
之溫溫然有氣相次如沸湯遂取於內藏

「(二ウ)

而有青色紋—青色而有紋

于—於

溫溫—温々

16 辟寒犀

開元二年冬至交趾國進犀一株色黃如金使
者謂呂金盤置於殿中溫溫然有暖氣襲人上
問其故使者對曰此辟寒犀也頃自隋文帝時
本國會進一株直至今日上悅厚賜之

株—枚

謂—請 呂—以 溫溫然—溫々然

株—枚 悅—甚悅

17 傳書鴿

張九齡少年時家養群鴿每與親知書信往往
只以書繫鴿足上依所教處之飛往投之九齡
目爲飛奴時人無不愛訝

┌ (五才)

往往—往々

足上—足下 處之—之處

目—目之

18 牽絲取婦

郭元振少時美丰姿有才藝宰相張嘉正欲納爲
婿元振曰知公門下有女五人未知孰陋事不
可倉卒更待視之張曰吾女各有姿色即不知
誰是匹耦呂子風骨竒秀非常人也吾欲令五
女各持一絲幔前使子取便牽之得者爲婿元
振忻然從命遂牽一紅絲線得第三女大有姿

┌ (五ウ)

牽絲—牽紅絲 取—娶

丰姿—風姿

陋事—陋土

匹耦—匹偶 呂—以 五—吾

幔—慢

忻然—欣然

色後果隨夫貴達也

果——果然

19 豪友

長安富民王元寶楊崇義郭萬金等國中巨豪也各以延納四方多士競于供送在朝名僚往往出于門下每科場文士集於數家時人目之為豪友

萬金——萬金

競——競 于——於 在朝——朝之 名僚——名寮

于——於

20 喚鐵

太白山有隱士郭休字退夫有運氣絕粒之術於山中建茅屋百餘間有白雲亭煉丹洞注易亭修真亭朝玄壇集神閣每於白雲亭與賓客看山禽野獸即曰槌擊一鐵片子其聲清響山中鳥獸聞之集於亭下呼為喚鐵

「(六才)」

鐵——鉄

絕粒——絶粒

煉——練

野——埜 曰——以 鐵——鉄

鐵——鉄

21 鸚鵡告事

長安城中豪民楊崇義者家富數世服玩之具僭於王公崇義妻劉氏有國色與隣舍兒李翕

豪民——有豪民 服玩——服玩 具——屬

私通情甚於夫遂有意欲害崇義忽一日醉歸

寢於室中劉氏與李弁同謀而害之埋於枯井

中其時僕妾輩並無所覺惟有鸚鵡一隻在堂

前架上泊殺崇義之後其妻却令僮僕四散出

尋覓其夫遂經府陳詞言其夫不歸竊恐爲人

所害府縣官吏日夜捕賊涉疑之人及僮僕輩

經考捶者百數人莫究其弊後來縣官再詣崇

義家檢校其架上鸚鵡忽然聲屈縣官遂取於

臂上因問其故鸚鵡曰殺家主者劉氏李弁也

官吏等遂執縛劉氏及捕李弁下獄依刑處死

封鸚鵡爲綠衣使者付後宮養喂張說後爲綠

衣使者傳好事者傳之

「(六ウ)

歸—皈

一隻—一雙

僮—童 出—ナシ

經府—往府 歸—皈 恐—慮

僮—童 輩—輩

考捶—拷捶 縣官—縣官等

檢校—檢校 聲屈—聲出

下獄—下獄備招情款府尹具事案奏聞明皇歎訝久之其劉氏李弁

「(七オ)

喂—餵

使—侍

22 瑞炭

西涼國進炭百條各長尺餘其炭青色堅硬如

鐵名之曰瑞炭燒于爐中無焰而有光每條可

燒十日其熟氣逼人不可近也

鐵—鍊 于—於

熟氣—熟氣 不可—而不可

23 敲氷煮茗

逸人王休居太白山下日與僧道異人往還每
至冬時取溪水敲其精瑩者煮建茗共賓客飲
之

「(七ウ)

茗—茶

24 物外遊

王休高尚不親勢利常與名僧數人或跨驢或
騎牛尋訪山水自謂結物外之游*

外遊—外之遊

游—遊

25 花妖

初有木芍藥植于沉香亭前一日其花忽開一
枝兩頭朝則深碧午則深紅暮則深黃夜則粉
白晝夜之內香色各異帝曰此花木之妖不足
訝也

于—於 一日其花—其花一日

朝則深碧午則深紅—朝則深紅午則深碧

色—艷 帝曰—帝謂左右曰

也—之

26 花上金鈴

天寶初寧王日侍好聲樂風流醞藉諸王弗如
也至春時于後園中紉紅絲爲繩密綴金鈴于

「(八オ)

26花上金鈴—標目の前に「天寶遺事上」の題あり

醞藉—蘊藉

于後園—於后園 紉—結 于—繫於

花梢之上每禽鳥翔集則令園吏掣鈴索以驚之蓋惜花之故也諸宮皆效之

27 七寶研鑪

內庫中有七寶研鑪一所曲盡其巧每至冬寒研凍置于鑪上硯冰自消不勞置火冬月帝常用之

28 燭妖

寧王好聲色有人獻燭百炬似蠟而膩似脂而硬不知何物所造也每至夜筵賓妓座間酒酣作狂其燭則昏昏然如物所掩罷則復明矣莫測其怪也

29 夢玉燕投懷

張說母夢有一玉燕自東南飛來投入懷中而有孕生說果爲宰相至貴之祥也

每禽鳥——每有鳥鵲——掣——製

蓋——蓋——效——効

鑪——鑪

鑪——鑪

凍——凍——于鑪——於鑪

「(八ウ)

燭妖——妖燭

座間——間座

昏昏——昏々——明——ナシ

怪——怪

燕——鷺——標目の下に細字注「張說封燕公何先兆之明乎」

燕——鷺

至貴——其至貴

30 饑燈

南中有魚肉少脂多彼中人取魚燒煉爲油或將照紡績機杼則暗而不明使照筵宴飲食而分外光明號爲饑魚燈

「(九才)

30 饑燈—標目の下に細字注「饑土成反食不慊也饗」

少—少而 燒—脂

紡績—紡緝 明—明 使—或使 飲食—造飲食 而—則

明—ナシ 號—人号

31 助嬌

御苑新有千葉桃花帝親拆一枝挿於妃子寶髻曰此箇花眞能助嬌態也

助嬌—助嬌花

拆—折

髻—冠上 眞—尤

32 病鏡

葉法善有一鐵鏡鑑物如水人每有疾病以鏡照之盡見臟肺中所滯之物後以藥瘳之竟

病鏡—照病鏡

鐵—鉄 鑑—鑒

臟肺—臟腑 瘳—療 竟—竟至

痊瘳

「(九ウ)

33 助情花

明皇正寵妃子不規朝政安祿山初承聖嫔因進助情花香百粒大小如粳米而色紅每當寢處之際則含香一粒助情發興筋力不倦帝秘

明—明 承—取

香—ナシ

興—ナシ、空格とする

之曰此亦漢之慎恤膠也

恤一卹

34 眼色媚人

念奴者有姿色善歌唱未嘗一日離帝左右每執板當席顧眄左右帝謂妃子此女妖麗眼色媚人每轉歌喉則聲出於朝霞之上雖鍾鼓笙竽嘈襍而莫能遏宮妓爲中帝之鐘愛者

┌ (一〇オ)

鍾鼓一鐘鼓

襍一雜 爲一ナシ 者一之

35 警惡刀

貴妃父楊玄琰少時嘗有一刀每出入於道塗間多佩此刀或前有惡獸盜賊則所佩之刀鏗然有聲似警人也玄琰寶之

人一於人

36 夢中有孕

楊國忠出使于江浙其妻思念至深荏苒成疾忽晝夢與國忠交因有孕後生男名拙泊至國忠使歸其妻具述夢中之事國忠曰此盖夫妻相念情感所致時人無不譏諛之

┌ (一〇ウ)

于—於 苒—ナシ

因—因而 後—后

盖—蓋

之—也

37 金籠蟋蟀

每至秋時宮中妃妾輩皆曰小金籠捉蟋蟀閉於籠中置之枕函夜畔聽其聲庶民之家亦皆效之

目—以
夜畔—畔夜 亦—ナシ
效—効

38 燭奴

中王亦務奢侈盖時使之然每夜宮中與諸王貴戚聚宴曰龍檀香彫成獨髮童子衣以綠袍繫之束帶使執畫燭列立於宴席之側目爲燭奴諸宮貴戚之家皆效之

┌ (一一才)

盖—蓋
目—以 香—木 袍—衣袍
效—効

39 醉醒草

興慶池南岸有草數叢葉紫而心殷有一人醉過於池傍不覺失其酒態後有醉者摘草嗅之立然醒悟故爲醉醒草

醉醒—醒醉

池—草 失其—失於 後—后
然—而 爲—目爲 醉醒—醒醉

40 盆池魚

明皇以李林甫爲相後因召張九齡問可否九

明—明 後—后

齡曰宰相之職四海具瞻若任人不當則國受其殃只如林甫爲相然寵權出宸衷臣恐他日之後禍延宗社帝意不悅忽一日帝曲宴近臣於禁苑中帝指九齡林甫曰檻前盆池中新養魚數頭鮮活可愛林甫曰賴陛下恩波所養九齡曰盆池之魚由陛下任人他但能裝景致助兒女之戲爾帝甚不悅時人皆美九齡之忠直

41 看花馬

長安俠少年每至春時結朋聯黨各置矮馬飾以錦鞵金鞞並轡於花樹下往來使僕從執酒皿而從之遇好花前駐馬而飲

「(一一才)

「(一一ウ)

後—后

指—指示於

陛下—陛下

爾—尔

少年—少

以—鞞—絡 花樹—花木

皿—盃 而從—隨 花—酒 前駐—則駐

42 香飢暖手

岐王少惑女色每至冬寒手冷不近于火惟於妙妓懷中揣其肌膚稱爲暖手常日如是

飢—肌

于—於

揣—探 常—當

43 金衣公子

明皇每于禁苑中見黃鸞常呼之爲金衣公子

明——明 于——於

44 花裯

學士許慎選放曠不拘小節多與親友結每于
花圃中未嘗具帷幄坐設具使僕僮輩聚落花
鋪于座下慎選曰吾自有花裯何消坐具

「(一二ウ)

每于——宴於
坐設具——設坐具 僕僮——童僕
于——於 消——須

45 銷恨花

明皇于苑中初有千葉桃盛開帝與貴妃日逐
宴于樹下帝曰不獨萱草忘憂此花亦能銷恨

明——明 于——於 苑——林苑
于——於

46 醉輿

申王每醉即使宮妓將錦綵結一兜子令宮妓
輦昇擡歸寢室本宮呼爲醉輿

輦擡——擡輦 爲——日

47 妓圍

申王每至冬月風雪苦寒之際使宮妓密圍於

風雪——有風雪 圍——困

坐側曰禦寒氣自呼爲圍

┌ (一三才)

呂以圍妓圍

48 風流藪澤

長安有平康坊妓女所居之地京都俠少萃集於此兼每年新進士曰紅牋名紙遊謁其中時人謂此坊爲風流藪澤

康庸
於于 呂以

49 依氷山

楊國忠權傾天下四方之士爭詣其門有進士張彖者陝州人也力學有大名志氣高大未嘗低折於人人有勸彖令修謁國忠可圖顯榮彖曰爾輩曰謂楊公之勢倚靠如泰山以吾所見乃氷也或皎日大明之際則此山當誤人爾後果如其言時人美張生見幾後年張生及第釋褐授華陽縣尉令太守俱非其人多行不瀆張生有吏道勤于政事每舉一事則太守令尹抑而不從張生曰大丈夫有凌霄蓋世之志而拘于下位若立身於矮屋中使人擡頭不得遂

┌ (一三ウ)

有ナシ
拆折 人人人々
爾輩爾輩 呂以 泰山太山
氷氷氷山 日白 爾後爾后
後年或后年
華陽縣華陰 令時縣令 灑法
于於 舉申舉
蓋蓋
于於

拂衣長往歸遯于嵩山

歸—歸遯 于—於 嵩山—崧山

50 禽擁行車

李元紘開元初爲好時令賦役平允不嚴而治
大有政聲遷潤州司馬發離百里士民號泣遮
路烏鵲之類飛擁行車有詔褒美之

「(一四才)

聲—声 遷—迂 號—号

51 鏡影成相字

宋璟未第時因於日中覽鏡鏡影忽成相字璟
因此自負遂脩相業後如其志

鏡鏡—鏡々

後—后

52 知更雀

裴耀卿勤於王事夜看案牘晝決獄訟常養一
雀每夜至初更有聲至五更則急鳴耀卿呼爲
知更雀又于廳前有一大桐樹至曉則有群鳥
翔集以此爲出廳之候故呼爲報曉鳥時人美
焉

「(一四ウ)

訟—詔

初更—初更時 聲—声

于—於

53 枯松再生

明皇遭祿山之亂變輿西幸禁林中枯松復生
枝葉葱蒨宛若新植者後肅宗平內難重興唐
祚枯松再生祥不誣矣

亂—乱 禁—ナシ

情—蒨 後—后

祚—折

54 顛飲

長安進士鄭愚劉參郭保衡王冲張道隱等十
數輩不拘禮節旁若無人每春時選妖妓三五
人乘小犢車名園曲沼藉草髀形去其中帽叫*
笑喧呼自謂之顛飲

┌ (一五才)

隱—陰

輩—輩

名園—指名園 沼—詔 草—巾

笑—咲

55 選婿窓

李林甫有女六人各有姿色雨露之家求之不
允林甫廳事壁間開一橫窓飾以襍珠縵以絳
紗常日使六女戲于下每有貴族子弟入謁林
甫即使女於窓中自選可意者事之

廳事—有廳事 窓—窓 襍珠—雜寶

于下—於窓下

窓—窓

56 四方神事

姚元崇爲宰相憂國如家愛民如子未嘗私於
喜怒惟以忠孝爲意四方之民皆畫元崇之神
事焉求之有福

「(一五ウ)

神—真神

57 立有禍福

盧奐爲陝州刺史嚴毅之聲聞於關內玄宗幸
京師次陝城頓知奐有神政御贊筆於廳事曰
專文之重分陳之雄人遇惠愛性實謙沖亦既
利物右民匪躬斯爲國寶不墜家風尋除兵部
侍郎陝州之民多有淫祀者州之民相語曰不
須賽神明不必求巫祀爾莫犯盧公立便有禍
福

「(一六才)

贊筆—筆贊
專文—方丈 陳—陝 沖—沖
右民—在乎 墜—隊
民相語—民士相語
爾—尔 盧—盧奐

58 移春檻

楊國忠子弟春至之時求名花異木植於檻中
以板爲底以木爲輪使人牽之自轉所至之處
檻在目前便即歡賞目之爲移春檻

春—每春
所—新
即—使

59 水山避暑

楊氏子弟每至伏中取水使匠琢爲山周圍於席間座右雖酒酣而各有寒色亦有挾纈者其驕貴如此

〔一六ウ〕

楊氏—楊國氏 圍—圍
席—宴席 各—若
驕貴—臨驕 此—此也

60 戲擲金錢

內庭嬪妃每至春時各於禁中結伴三人至五人擲金錢爲戲蓋孤悶無所遣也

各—名
蓋—蓋

61 射團

宮中每到端午節造粉團角黍貯於金盤中以小角造弓子織妙可愛架箭盤中者得食蓋粉團滑膩而艱射也都中盛于此戲

〔一七オ〕

盤中者—射盤中粉團中者 蓋—蓋
艱—難 于—於

開元天寶遺事卷上終

〔一七ウ〕

開元天寶遺事卷上終—ナシ

開元天寶遺事卷下

開元天寶遺事卷下—天寶遺事卷下

62 探官

都中每正月十五日造麩^{*}以官位帖子卜官位高下或賭筵宴以爲戲笑

每—每至
笑—咲

63 撤去燈燭

蘇頌與李義甫對掌文誥玄宗顧念之深也八月十五日夜于禁中直宿諸學士翫月備文字之酒宴時長天無雲月色如晝蘇曰清光可愛何用燈燭遂使撤去

「(一八才)

義甫對—封
日夜—夜 于—於 字—ナシ
之酒—酒之
燈—灯

64 刀槍自鳴

武庫中刀槍自鳴識者以爲不祥之兆後果有祿山之亂大駕西幸之應也

之—ナシ 後—后

65 富窟

王元寶都中巨豪也常以金銀疊爲屋壁上呂紅泥之又於宅中置一禮賢堂以沉香爲軒檻以砥碇墊地面以錦文石爲柱礎又以銅線穿

呂—以
賢—賢 香—檀

陸氏十萬卷樓本『開元天寶遺事』

錢鏊於後園花徑中貴其泥雨不滑也四方賓

客所至如歸故時人呼爲王家富窟

┌ (一八九ウ)

後—后 徑—逕

歸—皈

66 床畔香童

元寶好賓客務於華侈器玩服用僭於王公而四方之士盡歸仰焉常於寢帳床前置矮童二人捧七寶博山爐自暝燒香徹曉其驕貴如此

元寶—王元寶
歸—歸而 寢—寐 置—ナシ
燒—焚

67 龍皮扇

元寶家有一皮扇子製作甚質每暑月宴客即以此扇子置於坐前使新水灑之則颯然生風巡酒之間客有寒色遂命撤去明皇亦曾差中使去取看愛而不受帝曰此龍皮扇子也

┌ (一九才)

元寶—王元寶

坐—座 生風—風生

明—明

68 夢筆頭生花

李太白少嘗夢所用之筆頭上生花後天才瞻逸名聞天下

筆—笔

峇—時 筆—笔 後—后

69 醒酒花

明皇與貴妃幸華清宮因宿酒初醒凭妃子肩
同看木芍藥上親折一枝與妃子遞嗅其艷帝
曰不惟萱草忘憂此花香艷尤醒酒

貴—ナシ

草—中 尤—亦能

70 蛛絲卜巧

帝與貴妃每至七月七日夜在華清宮遊宮時
宮女輩陳瓜果酒饌列于庭中求恩于牽牛織
女星也又各捉蜘蛛閉于小合中至曉開視蛛
絲稀密目爲得巧之候密者言巧多稀者言巧
少民間亦效之

— (一九ウ)

宮—宴

輩—輩 于庭中—於庭中 于牽牛—於牽牛

于—於

絲—網 目—以

效—効

71 夜明杖

隱士郭休有一拄杖色如朱漆叩之則有聲每
出處遇夜則此杖有光可照十步之內登危陟
險未嘗失足蓋拄杖之力也

杖—枝

拄—柱 漆—染 則—ナシ 聲—声

陟—涉

失足—足失 蓋—蓋 拄—ナシ 也—焉

72 郡神迎路

〔二二〇才〕

張開爲荊州刺史至郡界風雨暝晦不辨面目
唯聞空中有殿喝之聲相次雲中有衣紫披甲
冑者十數人開問其故對曰某荊州内外所主
之神久仰使君令名故相率迎引到任謁廟後
各致祭謝及建飾廟貌自此政譽尤善也

聲—声
開—ナシ
使—史 後—后
廟—廟

73 縣妖破膽

李果遷洛陽令嚴刑峻濇民吏畏服縣之積弊
果盡革之踰月之中縣務清簡時有進士劉兼
赴舉上都舍於村邸至夜中聞戶外街衢中有
數人相語曰李令今之正人也吾輩見其行事
威猛令人破膽此中不可久居宜遷於他邑可
求血食也兼訝其事遂啓門視寂無影響方知
乃邑之神妖也兼遂書讚一首於村邸壁云狡
吏畏威縣妖破膽好錄政聲關於御覽後明皇
旌其能賜金百兩及章服焉

遷—迂 濇—法
果—果 劉—刘
衢中—衢
李令—李果 今之—今古 輩—輩
視—視之
神妖—妖神 讚—贊 壁—之壁
聲—声 關於—聞 後—后 明—明

74 泥金帖子

新進士纔及第以金泥書帖子附於家中用報
登科之喜至文宗朝寢削此儀也

┌ (一一才)

纔—才

寢—遂寢

75 喜信

新進士每及第以泥金書帖子附于家中書至
鄉曲親戚例以聲樂相慶謂之書信也

于—於
声—聲 書信—喜信

76 被底鴛鴦

五月五日明皇避暑遊興慶池與妃子晝寢于
水殿中宮嬪輩凭欄倚檻爭看雌雄二鸚鵡戲
於水中帝時擁貴妃於綃帳內謂宮嬪曰爾等
愛水中鸚鵡爭如我被底鴛鴦

于—於
輩—輩
綃—絹

77 半仙之戲

天寶宮中至寒食節兢豎鞦韆令宮嬪輩戲笑
以爲宴樂帝呼爲半僊之戲都中士民因而呼
之

┌ (一一ウ)

兢—競 笑—咲

僊—仙 而—ナシ

78 相風旌

五王宮中各於庭中豎長竿挂五色旌於竿頭
旌之四垂綴以小金鈴有聲即使侍從者視旌
之所向可以知四方之風候

長竿—長竿 挂—掛 竿頭—竿頭
風候—風候也

79 占雨石

學士蘇頌有一錦紋花石鏤爲筆架常置於硯
席間每天欲雨即此石架津出如汗逡巡而雨
頌以此常爲雨候固無差矣

「(二二才)

逡巡—逡巡

80 向火乞兒

張九齡見朝之文武僚屬趨附楊國忠爭求富
貴惟九齡未嘗及門楊甚啣之九齡嘗與識者
議曰今時之朝彥皆是向火乞兒一旦火盡灰
冷暖氣何在當凍屎裂皮膚棄骨于溝壑中禍不
遠矣果然祿山之亂附炎者皆罪累族滅不可
勝數九齡之先見信夫神智博達也向火言附
炎也

「(二二ウ)

之—ナシ 屬—属 趨—趨
嘗與—常與
今—令
冷—冷 凍—凍 膚—体 棄—弃 于—於
祿山—因祿山
博—博

81 結棚避暑

長安富豪劉逸李閑衛曠家世巨豪而好接待
四方之士踈財重義有難者必救真慷慨之士
人皆歸仰焉每至暑伏中各于林亭內植畫柱
目錦綺結爲涼棚設坐具召長安名妓坐間通
相延請爲避暑之會時人無不愛羨也

富豪—富家子 接待—接待

者—ナシ

于—於

目—以 坐間—間坐

82 冰筋

冬至日大雪至午雪霽有晴色因寒所結簷溜
皆爲冰條妃子使侍兒敲下二條看玩帝自晚
朝視政回問妃子曰所翫何物耶妃子笑而答
曰妾所玩者冰筋也帝謂左右曰妃子聰慧比
衆可愛也

┌ (二三才)

至午—到午

自晚—自曉

回—廻 翫—玩 笑—咲

聰慧—聰惠 比衆—如此

83 鷄聲斷愛

長安名妓劉國容有姿色能吟詩與進士郭昭
述相愛他人莫敢窺也後昭述釋褐授天長簿
遂與國容相別詰旦赴任行至咸陽國容使一

莫—無 後—后

女僕馳矮駒賚短書云懽寢方濃恨鷄聲之斷

(二三ウ)

懽—歡

愛恩恰未洽絆馬足以無情使我勞心因君減

絆—歎

食再期後會以結齊眉長安子弟多諷誦焉

84 占風鐸

岐王宮中於竹林內懸璧玉片子每夜聞玉相
觸之聲即知有風號爲占風鐸*

璧—碎 聞玉—聞玉片子
號—号

85 山猿報時

商山隱士高太素累徵不起在山中構道院二
十餘間太素起居清心亭下茂林脩竹奇花異
草每至一時即有猿一枚詣亭前鞠躬而啼不
易其候太素因目之爲報時猿具性平有如此
此_マ

┌ (二四才)

茂林—皆茂林 脩—秀
草—卉
具—其 平—也

86 游盖飄青雲

長安春時盛于游賞園林樹木無閒地故學士
蘇頌制詩云飛埃結紅霧游盖飄青雲帝覽之

于—於 游—遊 閒—閑
游—遊

嘉賞焉遂以御花親插頰之巾上時人榮之

87 紅水

楊貴妃初承恩召與父母相別泣涕登車而天
寒泪結爲紅水

「(二四ウ)

而一時
泪一淚

88 投金錢賭寢

明皇未得妃子宮中嬪妃輩投金錢賭侍帝寢
以親者爲勝召入妃子遂罷此戲

金錢一錢

明一明 輩一輩

89 精神頓生

明皇每朝政有闕則虛懷納諫大開士路早朝
百辟趨班帝見張九齡風威秀整異于衆僚謂
左右曰朕每見九齡使我精神頓生

明一明

趨一趨 于—於

90 口案

張九齡累歷刑獄之司無所不察每有公事赴
本司行勘胥吏輩未敢訊劾先取則于九齡囚

「(二五才)

輩一輩 于—於

陸氏十萬卷樓本『開元天寶遺事』

於前面分曲直口撰案卷囚無輕重咸樂其罪
時人謂張公口案

謂—謂之

91 言刑

張燕公說有宰輔之才而多詭詐復貪財賄時
人亦多之亦汚之每中書議事及衆僚巡廳或
有所忤立便叱罵爲衆所嫌故朝彥相謂曰張
公之言毒於極刑言好面辱人也

輔—甫

亦汚—汙

也—ナシ

92 消寬橋

長安東灊陵有橋來迎去送皆至此橋爲離別
之地故人呼之消寬橋也

┌ (二五ウ)

消寬—銷魂

消寬—銷魂

93 逐惡如驅蚊蚋

袁光庭累典名藩皆有異政明皇謂宰輔曰袁
光庭性逐惡如扇驅蚊蚋

驅—駟

明—明

驅—駟

94 歇馬盃

長安自昭應縣至都門官道左右村店之民當
大路市酒量錢數多少飲之亦有施者與行人
解之故路人號歇馬盃

「(二六才)

之—乏 號—号爲

95 吹火照書

蘇頲少不得父意常與僕夫襍處而好學不倦
每欲讀書又患無燈燭常于馬廐竈中旋吹火
光照書誦焉其苦學如此後至相位

96 金牌斷酒

安祿山受帝睽愛常與妃子同食無所不至帝
恐外人以酒毒之遂賜金牌子繫于臂上每有
王公召飲欲沃以巨觥祿山即以牌示之云准
敕斲酒

「(二六ウ)

斷—斷 斲—斲 准—準

97 文陣雄師

張九齡常覽蘇頲文卷謂同僚曰蘇生之俊瞻

瞻—瞻

陸氏十萬卷樓本「開元天寶遺事」

無敵真文陣之雄師也

98 射飛毛

羽林將劉洪喜騎射常對御使人于風中擲鵝
毛洪連箭射之無有不中帝賞嘆厚賜焉

于—於

嘆—歎 賜焉—賜之

99 泪粧

宮中妃嬪輩施素粉於兩頰相號爲泪粧識者
以爲不祥後果祿山之亂

泪—淚

妃嬪輩—嬪妃輩 號—号 泪—淚

後—后 果—有

┌ (二七才)

100 索鬪鷄

李林甫爲性狼狽不得士心每有所行之事多
不協群議而面無和氣國人謂林甫精神剛戾常
如索鬪鷄

心—志

101 肉陣

楊國忠於冬月常選婢妾肥大者行列于前令
遮風盖藉人之氣相暖故謂之肉陣

于—於

盖—蓋

102 傳書燕

長安豪民郭行先有女子紹蘭適巨商任宗爲

「(二七ウ)

賈於湘中數年不歸復音信不達紹蘭自觀堂

歸—皈 自—目

中有雙燕戲於梁間蘭長吁而語於燕曰我聞

雙—双

燕子自海東來往復必經由於湘中我婿離家

婿—婿

不歸數歲蔑有音耗死生存亡弗可知也欲憑

歸—皈 死生—生死

爾附書授于我婿言訖淚下燕子飛鳴上下似

授于—投於 婿—婿

有所諾蘭復問曰爾若相允當泊我懷中燕遂

爾—尔 燕—燕子

飛於膝上蘭遂吟詩一首云我婿去重湖臨窻

婿—婿 窻—窻

泣血書慰勤憑燕翼寄與薄情夫遂小書其字

遂—蘭遂

繫于足上燕遂飛鳴而去任宗時在荊州忽見

「(二八オ)

于足上—於足下

一燕飛鳴于廳上宗訝視之燕遂泊于肩上見

于廳—於頭 于肩—於肩

有一小封書繫在足上宗解而視之乃妻所寄

鮮—解

之詩宗感而泣下燕復飛鳴而去宗次年歸首

歸—皈 首—自

出詩示蘭後文士張說傳其事而好事者寫之

後—后

103 燈婢

寧王宮中每夜於帳前羅列木彫矮婢飾以彩

陸氏十萬卷樓本「開元天宝遺事」

繪各執華燈自昏達旦故目之爲燈婢

104 解語花

明皇秋八月太液池有千葉白蓮數枝盛開帝
與貴戚宴賞焉左右皆嘆羨久之帝指貴妃示
于左右曰爭如我解語花

「(二八ウ)

嘆—歎 示—謂

于—於

105 油幕

長安貴家子弟每至春時遊宴供帳于園圃中
隨行載呂油幕或遇陰雨以幕覆之盡歡而歸

于—於

呂—以

106 鬪花

長安王士安春時鬪花戴插呂奇花多者爲勝
皆用千金市名花植于庭院中以備春時之鬪
也

「(二九才)

呂—以

于—於 院—苑

107 裾幄

長安士女遊春野步遇名花則設席藉草以紅

裾—裙

裙通相插掛以爲宴幄其奢逸如此也

108 鳳炭

楊國忠家以炭屑用密捏塑成雙鳳至冬月則
焰於爐中及先呂白檀木鋪於爐底餘灰不可
參雜也

密—蜜 雙—双
焰—燒 及—及燒 呂—以

109 文帥

明皇嘗謂侍臣曰張九齡文章自有唐名公皆
弗如也朕終身師之不得其一二此人真文場
之元帥也

「(二九ウ)

帥—師
明—明 侍—詩
一—三
帥—師

110 乞巧樓

宮中以錦結成樓殿高百尺上可勝數十人陳
以瓜果酒炙設坐以祀牛女二星嬪妃各執九
孔針五色線向月穿之過者爲得巧之候動清
商之曲宴樂達旦士民之家皆效之

可—可以
坐—坐具
過—透
效—効

111 吸花露

貴妃每宿酒初消多苦肺熱嘗凌晨獨遊後苑
傍花樹以手攀枝口吸花上露籍其露液潤於
肺也

┌ (三〇才)

上—ナシ

112 含玉嚙津

貴妃素有肉體至夏苦熱常有肺渴每日含一
玉魚兒於口中蓋藉其涼津沃肺也

蓋—蓋

113 紅汗

貴妃每至夏月常衣輕綃使侍兒交扇鼓風猶
不解其熱每有汗出紅膩而多香或拭之於巾
帕之上其色如桃紅也

綃—絹 鼓—鼓

┌ (三〇ウ)

114 金函

明皇憂勤國政諫無不從或有章疏規則探其
理道優長者貯于金函中日置于左右時取讀
之未嘗懈忽也

規—規諷

于金函—於金函 于左右—於座右

115 擊鑑救月

長安城中每月食皆即士女取鏡向月擊之滿
郭如是蓋云救月蝕也

皆—時 鏡—鑑
蓋—蓋

116 歌直千金

宮妓許永新者善歌最受明皇寵愛每對御奏
歌絲竹之聲莫能過帝嘗謂左右曰此女歌直
千金

┌ (三一才)

許永新—永新 明—明
絲竹—則絲竹 莫—無 嘗—常

117 肉腰刀

李林甫嫉賢妬能不協群議每奏御之際多所
陷人衆謂林甫爲肉腰刀又云林甫常以甘言
誘人之過譖於上前時人皆言林甫甘言如密
朝中相謂曰李公雖面有笑容而肚中鑄劍人
日憎怨異口同音

嫉賢—妬賢 妬能—嫉能

誘—謗 譖—讚 密—□*

日—皆 同音—同音容有笑面肚中鑄劍也

118 隔障歌

寧王宮有樂妓寵姐者美姿色善謳唱每宴外

┌ (三一ウ)

陸氏十萬卷樓本『開元天寶遺事』

客其諸妓盡在目前惟寵姐客莫見飲欲半酣
詞客李太白恃醉戲曰白久聞王有寵姐善歌
今酒餚醉飽群公厭倦王何憺此女示於衆王
笑謂左右曰設七寶花障召寵姐于障後歌之
白起謝曰雖不許見面聞其聲亦幸矣

119 樓車載樂

楊國忠子弟時后族之貴極于奢侈每春遊之
際以大車結綵帛爲樓載女樂數十人自私第
樂聲前引出遊園苑中長安豪民貴族皆效之

┌ (三三二才)

妓—妓女 見—能見

餚—肴 厭—宴 示於—不樂
于—於

時—恃 于—於

樂聲—声樂 效—効

120 獮子亂局

一日明皇與親王棊令賀懷智獨奏琵琶妃子
立於局前觀之上欲輸次妃子將康國獮子放
之令放局上亂其輸贏上甚悅焉

亂—乱

放—ナシ

121 决雲兒

申王有高麗赤鷹岐王有北山黃鶻上甚愛之

但弋獵必置于駕前帝目之爲決雲兒

但一每 弋一戈 于一之於

122 長湯十六所

┌ (三三二ウ)

華清宮中除供奉兩湯外而別更有長湯十六所嬪御之類浴焉

123 錦鴈

奉御湯中以文瑤密石中央有玉蓮湯泉湧呂成池又縫錦繡爲鳧鴈于水中帝與貴妃施鍛鏤小舟戲玩於其間宮中退出水於金溝其中珠纓寶絡流出街渠貧民有所得焉

以一布以 呂一以
繡一綉 鴈一雁 于一於
出水一水出
貧民一貧民曰

124 夜明枕

號國夫人有夜明枕設于堂中光照一室不假燈燭

┌ (三三三才)

于一於

125 金鷄障

明皇每宴使祿山坐於御側呂金鷄障隔之
陸氏十萬卷樓本『開元天寶遺事』

呂一以

126 百枝燈樹

韓國夫人置百枝燈樹高八十尺豎之高山元
夜點之百里皆見光明斂月色也

127 千炬燭圍

楊國忠子弟每至上元夜各有千炬紅燭圍於
左右

128 有脚陽春

宋璟愛民恤物朝野歸美崑人咸謂璟爲有脚
陽春言所至之處如陽春煦物也

129 粲花之論

李白有天才俊逸之譽每與人談論皆成句讀
如春葩麗藻粲於齒牙之下昔人目曰李白粲
花之論

┌(三三ウ)

元—上元

點—点 斂—奪

圍—圍

上元—元 圍—圍

野—埜 歸—皈 崑—時

崑—時 目—号

130 醉聖

李白侍酒不拘小節然沉醉中所撰文章未嘗
錯悟而與不醉之人相對議事皆不出太白所
見豈人呼爲醉聖

「(三四才)

酣—醉

悟—誤

豈—時 呼—号

131 靈鵲報喜

時人之家聞鵲聲皆爲喜兆故謂靈鵲報喜

132 走丸之辨

張九齡善談論每與賓客議論經旨滔滔不竭
如下坂走丸也時人服其俊辨

滔滔—滔滔

133 探春

都人士女每至正月半後各乘車跨馬供帳於
園圃或郊野中爲探春之宴

「(三四ウ)

後—后

134 冰獸贈王公

楊國忠子弟以奸媚結識朝士每至伏日取堅

奸—奸

陸氏十萬卷樓本「開元天寶遺事」

水令工人鑿爲鳳獸之形或飾以金環彩帶置之雕盤中送與王公大臣惟張九齡不受此惠

彩—綵

雕—彫

135 嚼麝之談

寧王驕貴極於奢侈每與賓客議論先含嚼沉麝方啓發談氣噴于席上

啓—啓口 氣—香氣 于—於

136 醉語

李林甫每與同僚議及公直之事則如癡醉之人未嘗問答或語及阿狗之事則應響如流張曲江嘗謂賓客曰李林甫議事如醉漢腦語也
不足可言

┌ (三五才)

狗—狗 應—答應 響—ナシ

嘗—常 腦—ナシ

言—用

137 暖玉鞍

岐王有玉鞍一面每至冬月則用之雖天氣嚴寒則此鞍在坐上如溫火之氣

137 暖玉鞍—この章段全文ナシ

138 百寶欄

楊國忠初因貴妃專寵上賜以木芍藥數本植于家國忠以百寶粧飾欄楯雖帝宮之內不可及也

「(三五ウ)

于—於
粧—妝

139 肆香閣

國忠又用沉香爲閣檀香爲欄曰乳香麝香篩土和爲泥飾壁每于春時木芍藥盛開之際聚賓友于此閣上賞花焉禁中沉香之亭遠不侔此壯麗也

肆—四

檀—粗 曰—以
乳香麝香—麝香乳香

土—土 于—於

于—於 閣—閣

140 任人如市瓜

明皇召諸學士宴于便殿因酒酣顧謂李曰我朝與太后之朝何如白曰太后朝政出多門國由姦幸任人之道如小兒市瓜不擇香味唯揀肥大者我朝任人如淘沙取金剖石採玉皆得其精粹者明皇笑曰學士過有所飾

「(三六才)

于—於

唯—惟

笑—咲

141 雪刺滿頭

宋璟求致仕表云臣竊祿簪裳備員廊廟霜毫
生領雪刺滿頭求退歸耕養慵巖穴樂年之世
死荷聖恩

頭—頤

毫—豪

頭—頤 歸—皈 巖—岩

142 忍字

光祿卿王守和未嘗與人有爭嘗於几案間大
書忍字至于幄幌之屬呂繡畫爲之明皇知其
姓字非時引對問曰卿名守和已知不爭好書
忍字尤見用心奏曰臣聞緊而必斷剛則必折*
萬事之中忍字爲上帝曰善賜帛以旌之

┌ (三六ウ)

光祿卿—ナシ 几案—案几

于—於 幄—幃 幌—以 繡畫—綉畫

則—ナシ

萬—万

143 風流陣

明皇與貴妃每至酒酣使妃子統宮妓百餘人
帝統小中貴百餘人排兩陣於掖庭中目爲風
流陣以霞被錦旒張之爲旗幟攻擊相鬪敗者
罰之巨觥以戲笑時議以爲不祥之兆後果有
祿山兵亂天意人事不偶然也

┌ (三七オ)

明—明 統—統

貴—貴人

笑—咲 後—后

亂—ナシ

144 望月臺

玄宗八月十五日夜與貴妃臨太液池凭欄望
月不盡帝意不快遂勅令左右於池西岸別築
百尺高臺與吾妃子來年望月後經祿山之兵
不復置焉惟有基址而已

太—大

與吾—吾與

145 竹義

太液池岸有竹數十叢牙笋未嘗相離密密如
栽也帝因與諸王閑步于竹間帝謂諸王曰人
世父子兄弟尚有離心離意此竹宗本不相踈
人有懷貳心生離間之意觀此可以為鑑諸舅
王皆唯唯帝因呼為竹義

┌ (三七ウ)

密密—密々

于—於

意—德

貳—二 鑑—鑑戒 舅—ナシ

唯唯—唯々

146 美人呵筆

李白于便殿對明皇撰詔詰皆十月大寒筆凍
莫能書字帝勅宮嬪十人侍于李白左右令各
執牙筆呵之遂取而書其詔其受聖眷如此

于—於 皆—時 月—日 筆—笔 凍—凍

于—於 各—名

眷—睽

此書所載明皇時事最詳至
「(三八才) 此書—この前に別行にて「天寶遺事卷下之終」

一 話言—行事後夫字文間
夫字文—人文字

所引大抵出於此書者多矣

紹定戊子刊之桐江學宮山

陰陸子適書*
適—適

開元天寶遺事卷終
「(三八ウ) 開元天寶遺事卷終—ナシ

(張紙)—以下ナシ

(張紙)

此活字本也未有紹定戊子刊之桐江學宮山陰陸子

適書必從宋本出矣適檢新定續志書籍門有

此書知即紹定刊本也古書原委悉藉他書疏

通證明之有如是者余借校此於 香嚴主人

還書之日聊誌之以質諸 同好古書者

壬申夏六月望前一日 復翁丕烈識*

◎原状

3 賜筋表直

下—以下「謝」まで四字に朱の補筆あり。以下特殊な場合を除き補筆については注記せず。

8 蜂蝶相隨

都―卜の部分破損、補筆せず。類例は4截鐙鞭「之」・8蜂蝶相隨「都」・11記事珠「元・中」・128有脚陽春「陽」・132走丸之辨「如」など。文字に損傷のある場合、他の箇所はほぼ全て補筆する。補筆が行われていないのは単なる見落としか。もしくは全体に補筆を実施した後、損傷が進んだか。そのいずれかであろうが、判断は困難。

10 夢虎之妖

寢―穴冠に作る。以下類例多し。

18 牽絲取婦

少―朱の細字補入。

20 喚鐵

玄―末画を闕筆。類例は57立有禍福・63撤去燈燭。ただし35警惡刀は闕画せず。

山禽―本文は「禽山」、朱の転倒符をもって「山禽」と訂正。

21 鸚鵡告事

百數―本文は「數百」、朱の転倒符をもって「百數」と訂正。

24 物外遊

游―シ偏と「遊」に作る。86游盖飄青雲の「游賞」も同じ。

26 花上金鈴

惜―「借」の偏を朱にて「卜」に訂正。

32 病鏡

陸氏十萬卷校本『開元天寶遺事』

竟―この下行末一字欠。上部に紙片を押し別筆にて「所缺疑得字」と墨書。

54 顛飲

□―口偏と「斗」に作る（叫の俗体）。

63 撤去燈燭

義―右傍に朱の鉤点あり。「李林甫」と臆測し存疑の記号を付したか。李儀府との混同があつたと推される。しかし史実としては「李义」が是。

80 向火乞兒

脚―口偏と「御」に作る。

84 占風鐸

鐸―右傍は白墨塗抹の上に「鞞」と墨書。元の字不明。

95 吹火照書

吹―口偏と「次」に作る。

100 索鬪鷄

無―朱にて補入。

101 肉陣

選―本文は「婢選」、朱の転倒符をもって「選婢」と訂正。

117 肉腰刀

□―「密」もしくは「蜜」の上半分のみ、「山・虫」を欠く。

122 長湯十六所

類―左側「米」の下を「女」に作る。

128 有脚陽春

陽―料紙破損により左偏の「β」を欠く。

132 走丸之辨

如―料紙破損により右旁の「口」を欠く。

134 氷獸贈王公

飾―もと旁「巾」部分は「方」、朱にて「巾」と訂正。

139 肆香閣

閣―「閣」の「合」を朱にて「各」と訂正。

142 忍字

斷・折―両字右傍に朱圈点あり。

144 望月臺

玄―末画を白墨にて塗抹し、闕画とす。

帝―もと「帝」字を脱して一旦「意不快遂勅令左右於池西」と書写。その一二字分を白墨にて塗抹、改めて「帝…

西」と書く。

(二八才) 陸子適跋

此―文字の上方に朱の圈点あり。

識—文字の左下に朱の圈点あり。

(張紙)

識—文字の左下に朱の圈点あり。